

第82回日本遺伝学会大会 男女共同参画ランチョンワークショップ  
「優れた科学の芽を皆でサポートするために」  
～北海道大学の実践に学ぶ～

第82回日本遺伝学会札幌大会の2日目のお昼に男女共同参画ランチョンワークショップが行われました。出席者は約70名で、五條堀学会長、高木大会委員長もフルに参加いただいて、毎回ながら会員みなさんの関心の高さに勇気づけられる思いがいたしました。さて、今回は北海道大学での開催ということもあり、大学における男女共同参画のトップランナーとして先駆的な活動をされている北海道大学の現状について紹介いただくという企画でした。

まずは五條堀孝学会長から、日本遺伝学会における男女比の現状、また、大会における保育室の設置など男女共同参画実現のための学会の取り組みについて説明がありました。また、これからの男女共同参画は女性だけの問題としてではなくポストドク問題やグローバル化など他の様々な問題と絡めて考えていく必要があるとの考えが示されました。

北海道大学からの講演者として最初に、女性研究者支援室長であり札幌農学校開学以来初の女性教授である、有賀早苗先生から北海道大学の具体的な活動について紹介して頂きました。科学技術振興調整費での女性研究者支援事業そしてそれに引き続く女性研究者養成システム改革加速プログラム事業をうけて、ポジティブアクション北大方式の内容についての説明がありました。女性研究者採用に対して人件費の部局負担を軽減してインセンティブを与える施策については着実に女性研究者の上位職への採用が増加している印象を受けました。また、支援から育成へということで女性研究者の採用だけではなくそのあとのキャリアアップ、また具体的なスキルアップを促進するための様々なサポート、たとえば英文校閲代の負担や国



当日の会場の様子  
有賀早苗先生の講演（スライドには DNA 複製フォークを模した支援室のロゴマーク）

際シンポジウム開催支援などの紹介がありました。これらの支援は女性に限らず、若手一般に必要な支援で、そのモデルケースとしても興味深い内容でした。女性研究者を受け入れる前提となる環境整備と、その後のキャリアアップを二段構えでサポートしようという姿勢が明確なシステムだと感じました。また、最後に北海道大学の女性研究者支援室のロゴマークが DNA 複製フォークを模していて（写真参照）、女性研究者をラギング鎖に例えて DNA リガーゼの助けがあれば、できた DNA 鎖にリーディング鎖との区別はないとおっしゃったのがとても印象に残りました。

次に、実際に北海道大学女性研究者支援室を利用している研究者、2名の利用者側からのお話がありました。まずは理学研究院の黒岩麻里先生で、子育てと研究者としてのキャリアアップが同時進行でスタートした当時のこと、そして支援があったからこそ二人目を生もうと決心したことなど、ご自身の体験をととても素直に紹介されました。その中で犠牲になりがちなベンチワークのサポートに研究補助人材支援が心理的にも大いに役立ったことなど、具体的な支援の紹介がありました。育児との両立の中で海外への留学・出張が難しいこと、そこから生じた自分の弱点を補うための支援の活用方法が非常にユニークで、黒岩先生の自身のキャリアに対する前向きな姿勢はとても参考になりました。次に、情報科学研究科の小柳香奈子先生で、女性研究者のパートナーの半分は同業者であるという現実をふまえて、ご自身も研究者のご主人と別居しながら子育てと研究を行うことになったその経緯からお話くださいました。苦労話に終始せず、前向きにできるだけやってみよう、だめだったらそのときどうするか考えようという姿勢は、女性がキャリアをあきらめずに研究を続ける上での重要なポイントだと感じました。また、大学による子育て支援 NPO 利用支援の例、そして、夫婦同居支援策として勤務場所を限定しないポジション設立の提案もありました。小柳先生のお話から感じたことは、支援の物理的効果もさることながら支援されているという安心感や期待感、そして周りの理解といった心理的効果がとても重要だという点でした。今回、利用者側としてお話しされたお二人の、おおらかでありながら芯が通った、とても前向きな姿勢は北海道という土地柄なのか北大の施策の効果なのか、とにかくとても好印象を持ちました。

続く質問では、女性に対して理解がある職場でも、若い男性が子育てに参加しようとしてもそれは理解されない現状があるという指摘がありました。はじめの挨拶で五條堀会長が指摘されたように、男女共同参画はもはや女性だけの

問題ではないステージに来ているのだということ、そして本来、ワークライフバランスにも男女の差はないはずだということを強く感じました。

終わりに、大会委員長の高木信夫先生は、頭では女性のキャリアアップには様々な障壁があることは分かっていたけれどまだまだ本当に理解できているかどうか、と話を切り出されました。でも、最後にアメリカに留学したときのボスが年下の女性であったとのエピソードを明かされて、そのような経験を踏まえた上で、そんなこと（研究においては）関係ないと思うとおっしゃったのは、このワークショップで一番、説得力のある言葉でした。

（文責：篠原美紀（阪大）、写真：高橋文（遺伝研））